亜墨利加雑談集

全

ヲ7
3298

早稲田大學圖書
門 ヲ7
號 3298
卷
早稲田大學圖書館 昭和34.2.12受 藏書

海邉騒将義第一

唐愚人 東晴僕
日不信用 太左衛人

忠臣閑居、朝士作詩曰、慎、先王有非慮騒動、以威天下、民以艱難、上下無備、何知之乎、暫時吐咳曰、新普請足何以鎮之乎、士曰夫砲、賊之本也、怖之所由至邉復坐、吾語海、神変八方、打之不意、不敢氣絶砲之外也附火、測道、揚者高聲、以顕不意、砲之終也夫砲始傳臣中於防賊終損損身大家亡、無念何事延置其時、

大悪

酒氣狂句

師弟子曰、大砲、當世之夷器、而諸侯入金物也、於今
可見夷人打砲次弟者、摺頼高嶋之存而江川次之
学者必由是而迷焉、庶乎其不黙矣

猛士戦意地

士氣心痛

猛士見東愼王、王曰賊不遠千里而来、亦將有以傾
吾國乎猛士對曰、王何必曰利、亦有神祇而已、矣王
曰何以脱吾苦、大夫曰何以倍吾禄、士小人曰何以
保吾身、上下盖病苦而君危矣半鐘令騒江戸町者、
必勢例故、千貪之砲貴其敗者、必臆病之故、重取先
焉、戦取臆焉、不為不強矣、苟為後死而先利、不奪不
止、未有士而忘其神者也未有治而備其武者也、王
亦曰神祇而已矣、何必曰利、猛士見常源公、公立於
海上、顧勢備越俱曰士亦恐此乎、四士對曰、堅士而
後恐此不堅士、雖有賊不恐也、四士對曰經始砲臺、
命之制之、庶民造之、不日成之、經始為速、庶民集来、
忍有房総江奥所守、勇略紛々、江川赫々、王有靈廣、
晴満上奢、文王以上力為妻為妾、而民歡樂之、謂其
大曰水澤、謂小人曰狐門、樂有美報差別、古之人與
上與樂故能樂也、當世曰、此矣何亡我及我共已民
欲今君共工列而臺場為銃、豈能獨樂不哉

文王文恭院　水澤　水野　抓門　鳥居

更如奉之之死士諸命侯制人役之
生之行賀覚犬之警備諸者人當所
心菜青浦悟禦防岸海辱無無若傍
地愁歎年増本牧方之眦日勢無禮
無之走近人哀之外闢閉本其振逆
與力帰別猶更注交易之書翰早斂
成城夜章引恚進来国東船君早陸
常登中周如之櫛始異国之兵前捧上

陸大筒之雜場之終頒謚静平大之張
之出新益費臺騒多異御代曽具古
隱度調無餓築来理國咄出漸足反
居二備内取請春固〻乇拜儀無求
之本日其來輸返融通金借餘當手
武歴〻古日足軽之一困窮家人之
器之鉄砲日練之間切来大御難曽
騎馬砲之之調如世留久借金儀甲

城登節倹臺川来閘翰書治姉望偏
江素夜場下船品渡是少陸文子神
質户亦天國ゝ儒金氣亜永上光弱
悪無騒異仰者悩痾千弘墨日師迷
益判表動一若趣水安貴勢利心水
人賀評同如西老△尾度氣伊規福加立
浦皆苦出終乱□首今皇顧船山新刻夷
句和惰配再丑世伏牧駒欺郎筒茎
解上心弱年慢叶鉄込木官人船大
親玉月六迚不驕至太任个忽所笑

異船避機關

西番髪

禄福骸黒繪津拳翰葉急来晴
謂放為大衆大而書出兵浦船
無地土區議戯冩國異番賀加
頭高賣弦師西出女中落礫利
評器益三近星城隠悲月川墨
受武得歡銭慧内雲郭外驚亜
下直農上無説是正亜西船龍
置物民免欺秋癸到後魯水川

主償痛畠田夏丑崎長游底深
困専酒無悉搦捕嶋赦洲先浮
南有賣客茶人西高免来臺面
海固比国挽異国杲東都塲海

又一種

朱引流法下倣之

諸一明四恐
縁三家趣
家二多備

不一来
治時節
臨固船

烟嘔船
嗅気甚
莖催昇

富芝疲
娼家嘆
貧飢怕

洋夜泊
陣中士
港護船

綿呉賊
陣服賣
絹隙貴

心御船
水気廻
病毒労

北護来
黒船返
魯国帰

向土景
神風之
殺空船

異帰来
神国恐
来頻船

職藝隙
士人疲
町窮忙

大武意
揚名気
高士衆

諸民為
清家政
国数備

異南騒
一国望
隣島募

又一種

當凶噂
豊年處
明様騒

西八船
十方暮
北斗星

異漁止
役船労
廻窮来

武不少
安具足
皆品類

唐漁無　諸自強　西宮危
使船止　倭国騒　八方困
通窮来　異愁驚　東難穏
家夜苦　町方鬧　海近噂
日中勤　唐人眠　野邊煙
暑悩働　役悃悲　公賑固

よわくるし武士

唐まつし騒動りおこりてより昨世上の噂を聞てもこん般へ
先年此方にて唐人騒きて交易し其時次第に出しをくら
下の返事をせる故いよ〳〵器にのり薩摩船とふ茶にしあアメ
リカ香港し阿蘭さんこまつて戸田さん浦賀の御台場御手
薄なりとハ初手からの知れし事よ御為御益し新定事行ハ
自分の御勝手諸人の不勝手なし一も拝ハ先上納今をも
下されませも取るのとらぬのとつきをつとを云ふ高南
くに御免とおゐ申す弃捐ハおるいの酒宴ハなくらぬのなんの
かのとてむやみに掴出しのつかぬかんの大金ぐらゐほふの

大筒騒ぎも出のあるいとハたまさかに嘶く時に書翰ハどう
しゝ済ゝちんぷん漢文の評議まちまち和解し風情か
くるりと也て一向しれてとうあるとのかよ文武しと
今更とせおと嫁にちんかんかまへて因果いひとる
云ばかりひ露へ届く手先も御合が肝一やまして伊勢さん
どうしてこそんぢよ来年三月大きる騒が出来るも知れ
栄書ハ御停止栄屋ハ為に思ひ云ふ所あく人に江川さまの
上書を差上げボンベン仲間が唐人自慢の育ち出来るバテ
レン流義の御台場同論人のんど首なる浦賀に据ハせ
皇の先なる品川迄りへ生海鼠の出てる入札御台場足留に

かなぐひ志はりかるひての一ッや二ッ搬へとりとてとうあるをんよ
浦賀の海をせんと通して御皇の先なるあぶなひ
處ではしめる据りかとん為事ゐよ肝のなひたなしだ
此地へ生まれて蘭語を肝一頭付鉄炮調練なしとくハ飾り
為ある御人がなるそへ揚といふのも通ふあらうましくより
鉄炮ハ異国の物ぢよ諸流和流と云のか定かしひ御旅が
志まじまに唐本の重きんとて知らぬ御存しらう為称へ天狗が
深山ある故識に出満るハ伯父為の本ふ嬉き山麻の山師に
今更文をまつて為思ふ事の丸見さんとてもろこしぢよまんなる
事をいふ志やる事ぬと叱りちらして隠居を引おし

御智恵拝借めつらしにのし思世為の御進をこちつと考へ
候つまりハ御人か肝要至ハアんでいる忠義ハ歯をかみ
此武士ハ出ヶ弟読書ハ川上ヶちく浦ゟ押込流行なんと
伊勢さん孔子の教もとくかくいふ事済して甲府へ御開き
なぞとハ云諸因所出しもなし孫へ此芸当い読でなきんぶ
奥足や甲をかまひもいひもむ中ゟ叩あどかくいくめひ
とくはるつまりじ絶病借拝借金中ゟ天下金のこ面白
おかしくなしなめか文句で人の氣あんをとくくといふのか
其手ハ喰孫へ銭中ぬんとし古切なへどくひ孫でおしてこさ
まて文句ハ今の浮世じや中々新孫へ金銀なへぞハ御云儀次

第でどうでも此事為あれハ結設かられてゑん遊る不徳者
なれり結ハ未なりをのましくか其身を嫉み忠義を尽さハ
国より善き日本ハ神國アメリカヨロシヤの歯かなつをのかよ
きろしと吹中毛神風とく

海岸之御警衛異国立陣伍御備ニ先頭御西洋様方候
御勇敢可致奉御鍛錬候各家様至極寿存候石炭補之御煙
恐為以御定度呈興足ニ兵法道事

臨難寸日

蒸氣船造
返帆

甚端之進様
追入人々沖中

京氏ケ浦賀どゝじやうし

「弱者に船ハ数くごきる檣に帆を売る時ハ世上むしやうと
さわぐ事わさの噂を売る時ハ世上めつたやたら運ぶなり
鉄砲のひゞきにハ生滅めつい大筒ハ寂滅為楽とひゞく
なり皆てあしく流く人たかり誰も具足ハたれやら
に陣屋の月をながめあかさん「月でも知らぬ汐風
に乱すもみさへもつまいるひハ兵をぞり来てどうでも
アメリカ悪性さの軍くと騒ぎまておして顔の武者錦
評議もさへ唯うかくとどうでも阿部さんハ縄縄の回
め備へハたしかさのじやへ「異国船来て武士も餓に

具足を求め法といきさぢの此大名へ花の此江戸ハ日くに
此用でアメリカ話し勤まる身ハ誰もわしがる此身為
ふかんの出かけ異国船より汐を捲立て船の子のり
そまじかわんにおじや一イ二ウ三イ四ウ帆縄船のり浦賀
の関路ともに海邊も固めきてあれがたるく此アメリカ
とほんに騒がしいやじや

其頃し京志ら浪ぞ紀

「嘉永廿五七飛んで千里をたゞしる寅のとしとてすぐ河の
のさへもたるく海路を越へてよせる河の浪のりはむ船ハ
西ハ是より東に河つり此につるる亜墨利加世界共和

船治や合衆国のワシントン府る船を以て船のみトしを成変
に向けて走る日あてハ大日本の江戸へ入海浦賀の鼻を
将晴のりこし波風を走る船の名ハ相めつらしや志的ヒけはん
るぼてるふまじろつと羅針と羅脊枝櫂々綱ぞてはや帆きれ
帆を三多人かけて胴ハ鉄の大筒の内に燻り多やをくろ石炭焚
て船の左右へ車を仕掛自由自在の船城なれハともにみよし
へ大筒小筒をべちべち揃へて目だゝくうちに武総相模の其
国もどめへ夜に金沢村の沖へ長さ八十二間をそんしめ四十六
二千五百石以上七艘従を御もて並百万人格の日本勢ハ異国船よ
とお界を定め江戸へ注進矢をはつくてよく安房と上総の下総

常陸武蔵相模や伊豆駿河の陣屋ヶ台場さし堅
に人数を配り旗さし物を何とも吹来る神風ともに山と陸とに
充るゝへきされて武家の備への輝きまするヤシヱイ月晩小サイく日
あふ次大小名の許くの書めハ目を驚し伊豆の下田ハ非常の
備へ高き其名ハ三国一の富士に名道き沼津の城兵はやくわ
別こゝが の出張参し大久保かくやく備へ三備 志田浦沖へ
井小台田續く出めハ長口の国荻の城兵かきゝもいさましく
外に内海九法の役目おまん浦賀の小嶋へ探ひ陽
て大津の国めぐるハ名におふ蛇の目の紋虎の出くりの無女
きるり勇士を採ひ拳を振り船をかくんで小柏奉る国ハ

武蔵とうつろふ船の名本回琢令津浦ハ意の領主の
菊舎然らし然手たつ家法手際立て月立法の本牧泉
ハ意を固めて周囲の田畑武蔵子葉室飛鳥の羽田大森
一番に岩も四里の途端をも気に鉄砲前にして見里の鐵砲
揃とハ拵いきましや是ハ日本一なる陸の左右の大筒の出歯
めるとる成勝元にもたや稲進きし出の湊の品川沖へ海を
埋て八町四方数合二丁本其水を場ハ高さ二三丈石垣築き矢
きをたさ高に杭打並へ一の出めハ川越を高よつく舎津
ハ二重の固め其の城主ハ東三重て廿五貫の大筒並へてん備
早船往還舟を数艘繋きて東をも見張めたハとらなから打放

きんと手たつ定て備をなすやシレ丑川 円妻ハきとあし
きかりの楼の名所御殿山なる成固めこそハ毛唐人めを
落むのまく乱とり防きを須数乱きんと沖を見据津山の
城主なる中まじる播十八町の岸の出めハ九州一の殊の唐人鴨琉球
中ても高に突きし楽の出紋つく芝浦重杉かあて佃島
中て幕打出し陣を播磨の姫路の城主陸や長刀大筒並
へ揃ふひ出めて待つ鉄炮洲四里と四方の浜城下ハ色ハと
ききて手拍子木を打を立岡に其所々の火消人数の
手配定め纏ひ高口能出し若へだいすつむ組一番組と
二番七組さうもむやうに笑彼揃なる成門に通きし表通りに纏ひ

を定る次に二番七組揃ひいろは附なる其町下の仮字て
あつる合杉橋の南詰ふと出めの人数ハ番九番の纏を
並へきても誉るき三縁山の表通り小詰合まもる又ハ六番
九番の火消千代を出し如く大盤の橋の松の由紋の示へ
く並ふ流まる八番十番組ハ日本橋から江戸橋くの北あ
要害とも岸辺ふかく紀国の御寄ら寿るやこし其ハ関東でも廿五
異国の異船こそハ沖を詠て由らしくせんくらつだちやふ
めらしきやびあんきんの大手若きも浪方小留哉益牧六尉
にかふ宿敵しもし手舟そで示く察せし其の類ひハ梅
西うにくや無禮働く其折からハ武勇兎るどき我神国の

威勢威徳て征伐せんと諸家の侍へもきも厳重にちかう海辺
下総領ハ濱の村むかふ糧船まても用船とて皆川上る春の
海辺の中ふさむ川もかつておひぶちおつこめの上総数の人
数もたせ来るくる里まわてどきすてんほ異国のやから歎
に猪うらなつ紀も添くあくまうち紀すつきひやくしゅの
皇も天下太平てんじん山小並ふ岩山のこぎり山もかれの
揺ひのかつ山つきせみ小やつこや四の沖(?)退もおる勇ある
き日本勢の威勢異国の国を驚かす事を好ぬ究んに
大灰(?)せて恐歎退ある世ハ荒き浪風治る御代の民もゆる
かに其の下しみの御代まも忠勇く事をうなひんや皆出

のめ〳〵みる武家の有さましハ記録にのこるや〳〵土川

アメリカ追手状

そも〳〵国の起元事方国にたくひなき八方の要害古年

の地なりをるしてなお昔の名を中に陳の仕法の旋をとき

勢ひ頼みに立こもり魔を織に始りしハ味方何までも仕為へ

と陸地の方より出るふ「アメリカ」忽ち敗北となり皆ちり〳〵逃

乾をかきことの居遠居を始ませしより其船たりとも

きりしかバ味方古識といふ此意を遣り下し強へしより松

を平らやしもともやかやうに起致松平乃戸公武備の

備をへ文を八君に捧て此安堵の紙の具足や古波の證兜の合

退候ぐらくとつと異国の船を付よる此代そ之公家衆

伊勢守殿ゟ渡

此節異国船近海へ渡来致し居追々絶望の時節に

相成候ニ付而ハ彼より若難題を申掛候節も難斗

猥騒ニ不及候乍去油断無之様心掛可被致候

右之趣向々へ不洩様可被相達候

二月

策拙倹

おふミへ女のやうでおいらきんにか増がおもきでとつびき
びいのひ初てハもろ志し交易てらんく天下ハ大き
＿きこもくおきこまる隠居さんさんのころこがやく
書籍を和解しくりとまめて拙倹しよ
甲の人「アメリカおとまへ出く
ろあへにもく
乙の人「おらア日本へ兵粮船乙よく
甲「日本しやア上ケ孫へ女郎買せ
乙「上ケるけりやア鉄砲を放して帰るのぶ

伏稟

浦町中様信ニ横濱悪く書面饗ニ随而先年小港町へ
小廓ニ客キニ而日増不繁昌仕り難有仕合奉存候
然ル處今般浦賀表様ニ出帆有之手屋之蒸気船
渡世ニ始ニ而相始ニ付当六月中浦賀表へ火船
勝絞ニ始ニ而亜墨利加の事ニおるくに
叶不申ニ付又ハ新工夫仕来ル之月ハ浦賀名船
火輪船大砲船ニ飲出巻へルリ類拙出し皆
始ニ而有之故船十船ニ摘候下ニ而へハ岩之悪ハ南の

隅の田港中が墨しる證ふ省何年綴おし
常日より燗焼くく田霜火の総偏くもち希ん以上

暑中手鈔衣 ほしいひ
新製 田傳ちるり
浦賀名物 アメリカ嵐
品川名物 水船頭
別製 阿部川餅（ニツキ）
田園 夷説口

桐列浦賀沖
大店 貽利嘉屋
亜留理

アヽおそろしの苦月

当世役者見立評判記

誰が見てもおふろげの名ひ花切物當時日本一の大立もの
随分評判も藝もにてるひが根つよくきつかりとしそろしい魯
えんおけハ立派しぶやくにあちまのもん
古人ふありても征和しとり和しいくいひてもすん
揺り舞基をおんてもきこつてやりまくく
然用にみんへるが極あふるひ藝て飛りたつましがおりまけく
未てハいやがりまちまくく

小石川の隠居 七代目の白猪
福山の 助高屋高助
中老場の大福 嵐吉三郎
皆様外の田男 尾上松助
熊本の城主 嵐璃寛
西洋流の生き〳〵錦絵 市川小團治
異国 国船
中村歌六

何をさせても噺ゐくよく
やりまするの田舎向さ

江川太夫座
築 三十郎

ゐ海若して藝も未熟ながら
当時のきゝ手の

同 工師
岩井喜子

上手下手にかゝはらず人に
知られる

具足師
八代目

働きハ格別骨折ても下の気ゟ
多くて気のしい錺てありまする

アメリカ土産の和解
森田勘弥

たやすい事を綺にして骨を折
まぼがちと藝才で業事うけまする

誂治屋の具足
武手の烟草

あぶまりしか藝なら当時の人芳
一の役者と思ひまする

調練の進退
坂東志うか

同年に沢山藝ゐけしと
うこ思ひの所をうりやまする

会津の城主
坂東彦三郎

中くうまみをやりまするかし
事に拙かるひ

やうやう藝も若いの今に立身のに
あゐまする

拷数屋
大谷友右衛門

赤坂の旭若殿
坂東竹三郎

難言

たやくおおよ
ちつりおしよ
うるさしい孫へ

又屋敷の隠居
出城の守
芝の和尚

おハなひ孫へ
どうしてもんなどよ
かんとうおへ
きなあひ事をかしてるひよ
いやなよ
おかきひ孫へ
おやたいつこよ
こつときつくおしよ
よくなりま答よ
いまこそうになりまたよ

日本の船
世の中の景気
世の中のうハさ
百石あての水手浴
八十万石
石火矢
おもくへ
伊勢との
ほらの貝
御名代の蕗年寄

もういろいかく
志にさうに思ひますなあ
ましに帰りくへ
又おおよ

小星鋼

あんしにきてんしなへ
とうからなるをおそいまりしこよ
たやく帰して志あんなうさ見
志んかうしてねるなましよ

掃部屋の返
若殿の返
かこめの人数
八月小
呉服船
船のまる沙汰
浦賀の町人
仙国の虎

満水氣がとめましたよ　福山の

うそぶくと抑まひましたよ　船のくるたるし

来るこびしたるしが遠ひましたよ　御船手の御進御家来

たんや祢なましよ　御国の御家来

大将てやらまてハたまりせんよ　海岸の御家来

そんるにあわてハいやとまたよ　諸矢の御場

夏んと用てくんなましよ　兵粮の屋

いまきをうになりゆしたよ　御老若

はやくぬいてくんなましよ　神風

大きなきになりんしたよ　浦賀の奉行

祢ぶるそのハたやくあんなかつしよ　御勘定奉行

あん定ありたりませんよ　大砲の数

いくらひとめてやんなましよ　御家人の札差

いつても川るとおらさるをまするよ　御町の御登城

あらくさんぶんてさそれ苦しんでる海辺ハ　小普請

おまたんがあるひどやアいけませんよ　御手の陰居

今度来る時ハちとよ手早くきかなよ又来る船のたたきし

そとでもとらがふか帰りするんしたよ　異国船

きうあいようつゝ祢く　諸向一同

甲寅年大小

太平の[四][二][十]人を[七][八]ませて世界[十][二]八[六]一つなき搗入
小おひをきらくで[君]如隠居[三]ふ[留]守居ある[五][九]らう
の[正][丁][大]の合て具足の後をるあいさ[半][小]の留大も七し

来年の大将若労あつて十二代の
不調法

丁大の重て具足の七をおし

浦賀奉行井戸石見守大同付へ跡役
大同付石見新条唐人よろし請合之吏
アメリカもいふひゃのく

海城寒柝月生潮　波際連檣影動揺
従是二三千里外　北辰星下建銅標

ベルリ絶句

忠臣蔵見立

大序　鶴ヶ岡の段
彭に似合ぬ会中ねる
思ひもよらぬ異国うちの附参

二段目　松切
家の秘事にハあつともおもハヤイ
細川家のその入

三段目　喧嘩場
コリヤ大じな事かねて軍めさろく
軍艦古の船きふとひ

四段目　判官切腹
ヤレ待かねたハヤイ
通辞の脇下し

五段目　鉄砲場
人足と荒ほ全の下口もひ
設付鉄砲火打石

六段目　勘平切腹
よきやくと思へども
本牧の鼻より軍船つゝこナア　牧中の出登之城

七段目　茶屋場

八段目　道行

九段目　山科

十段目　天川屋人形也し

十一段目　夜討

此端子ハ猪牙か遠ふてワイニミ
異国船ハ家伺の役人
たしなミ忠中の親子つれ
浦賀の云色
とふんの相手に揚る薪木庭
親子ハハアノくと手寄猪か鳴るく
浪来ぎみのはしゃめりじやく
武士の上茶下茶あかしの女房又妻ハ気のつまるく
只ひもよしい恩見み御座より
小石川の水隠居

ゑ大力

「異国の船の伊豆越て来る中寄て物思ひ気をくへ焼まそて候る
ぬるとても縁と時世の来るをまつきくすんとやくあつこめの心さ
ましく陸へハ寄せ思蓮氣船さハさりなから帰る志あるなき異
国船やそて逃よそそたしろぞへおしき婦孫端そろはしく

亜墨利の汲汲

「出きこし浩しい思事の和らい来とて今を望に桶川の堅地
の兜陣羽織着つく荒ふし声つれを呼し出鳴の浦賀懸に
「待しき速か去ふ波の寄せる湊に世を渡るいかにも此身か亜墨
利加しやとて辛苦万苦の気をもみくて「いつか嬉しき水浅事
を君ふやたやく告仰しと御話せる人にいふよう「あひ
いふて居まし八罪ハ我ふいうり置て八罪も重るや「つくハ数く
彼ハ分るれしる異んぼう音ハ名ふいふ内海に船をとく
めて体じふひ思「居ん渡せハ恐ろしや別しるまの水おふぎ
裾とる舟のヤワサッサア波を直へして帆を引上る居んな

唐人のこゝやちりくちりくたつと石火矢の煙さへ立上る海
よそとせぬへ来る事悪むなる事ふありても立去り由なし
我も帆かけにしぎく諸ともに日本国の怒めしや国我身こそ今ハ
仇なましかんさみけてきけて争ふ其時やついなれもしれて何も
知れしてそれなりに二ツ称かひ必とかけてぞ教も　愚ひ
やつらのそなんぶ文聞徳てましふ分別ふてよそく文も来無よ
約束を忘まてきてゝのじやるいかひるをましからみ理るを云かけ
なまて引ふ引まし思中くに国に逸てこなまや兜をぬいで兆条
こセ人因果るまやいつでもおんせんに指折其日の来るを待
いよわとなるくわんへにありアンジヤコレジヤと気をもみ切て白旗の

降招(トくご)も水府を立上りエイくエイの声かけて掛云又支実宮の
来まセんといたましあらし思ひも寄らぬ安堵をなす者多くと
間帳やて帰る船の夷の伊豆の浦賀をけて亜墨利加と嗟
しも今動かんましハ神風たかりや驕るらん神風の吹時ハ
世々ふ驕るらん

北アメリカ海上の由来

抑本船渡来の由来を委しく尋るに其本ハイキリスに志
ていつまじの時から北アメリカに渡り其地を開てもろくの国々の
者を集め新に合衆国とぞ名づけ居る細るに其国の広さ
日本より百倍してゐ穀おき敵党を熱ひ地様ふ知としし

き火輪船を操へまん〳〵たる大海を十方へ押渡り食を
求ましむる中〳〵ほと〳〵此故ニ結縁の為日本相州浦賀
の湊へ着岸して海上より御先陣の御方々へ追うて
進ミ参らせまする

御茶場へ〳〵〳〵〳〵ハせいとうへひろるいし

三右山
御存中

右之口上書ニ候中ニ残し置候

一御国中様並御機嫌能御揃御座無成至極奉存候先達而
天竺紅毛イキリス「ヲロシヤ「フランスの細工物ハ古めかしく候故
当月六月中アメリカ「ワシントンより蒸気船ニて奇代の船

差出し浦賀表へ漕入候處御武家様方を始御町中様近辞
判ニ預り御大名様方ハ夫々御国々の本戸御備理御町中様ハ
御役人の無之招御用公の暇持ち高々くコリヤ何ても大当りと
大悦ひ致候へ共僅四艘の船ニて八離れ業も出来不申依之来安
の春に至り数艘面白き船へ毛唐人を乗せ猶々の浦賀表の海
迄を乗出し大筒小筒石火矢取揃へ揃名様の御国を驚
藝道仕候可有入御覧候海上の藝道故手摘し八任用捨
差下異国ふ使し思召製造の御趣向を以御入来之御組
奉希候以上

御アメリカ
ベルリ

乍憚口上之趣申上候

一当々様ニ機嫌能ニ而余年之間太平楽を謡ひ楽みし其中
へ此度異国之アメリカより蒸気船を渡来して来三月興行
之由諸人之目障耳障ニ相成面白く関東勇筋の武勇を
撰みたるの備へより始鎚之長短長刀の遣ひ分け流々の鉄砲
太刀打の軍業神代の妙術を顕し百万の船を寄る云神
変不思議の術を仕付沈め四海波静々健ひ猩々舞にて
御云浪の鼓取て打て打たんせ下々申者共迄も見物あし
るへて御安全之御見物偏ニ奉希候以上

丑六月

武士騒言　蒸吹

アメリカ渡来諸人さし合薬

一　天下一方ノフセキ　　御台場を沢山備てよし

一　フシノメサノ　　当海手の心用ひてよし

一　キンニウヽ（金入）　　百姓ハ割付てよし

一　太鼓丸　　武器蔵の者ハ当時用ひて至てよし

一　コンキウ　　世間一統なれハくやまぬがよし

右者往古弘安之頃筑前博多へ蒙古ら傳へし霊験風之遊
ひなるしく相成此度相弘め申候用ゆる時ハ忽ち人気宜敷
諸人頭痛をやむ事疑ひなし

相弘所

私く相弘前ニ登り當宮寄々二而一階ん可之下候

相州浦賀
台場番造

物ハ尽くし

入用な物ハ（諸人の賄金が／蒸気の稽古船）

ほしい物ハ（亜墨利加の横玉／ペルリの金玉）

やかましい物ハ（打払の沙汰／浪人の評定）

黄いろな物ハ（アメリカの金山／トルコの船大工）

射てやりたい物ハ（彼及黒船の玉／返帆へ使者）

づるい物ハ（挨拶をせぬ役人の幸行に／諸国で打ち払ふ中間）

あやふきな物ハ（跡先しても世話をやき／たゞ騒ぎ出して／払場を取る遊山のまんなく）ら鉄砲入つた物ハ

見あきぬ物ハ（浦の内外／行末のありさま）

たきくさし物ハ

不用な物ハ（新規の品々の／三ツの水基場）

おしい物ハ（浦賀の旗本／六々の異人）

むだな物ハ（諸々の武勇に／つまらぬ兵書）

逃したい物ハ（浦賀の白旗／横浜の新宿）

消えてやりたい物ハ（天下太平の水鉄砲／必死の二字）

ぬけ目な物ハ（和流の鉄砲／長崎の通詞）

のがれな物ハ（新規船の名前に／水役の書付）

朝の寝き物ハ（神妙より早く兵端に／防御の金儲）

小さくなる物ハ（下田の縄張に／向後のまかなひつき）

大師詣

武蔵羽田沖異国船渡来之報告一たび世にひゞくと江戸を立て
芝浦ゆかしき浅の水国め築立の水基場を拿く数人の辛苦
織りの被幾をいとひ陽しく思ひ川崎平間寺に詣て厄除弘法
大師の称号を祈しかるに御かげ 皇国の異変をも消除なしたまへ
佛前にぬかつき掌を合て南無大師遍照金剛と唱へ祈念を
こらし丹誠を凝らし暁眠を催し夢現とも見へぬ折から数多の
人々堂に居並び異口同音に念じ居る中にも

柔弱なる武士とみへて

南無大師遍照金剛　　随喜あるよく志すものなり

又傍ハ本牧田より江戸酒造の人をとなへて

南無大師遍照金剛　清大事泥舟堅固

浦賀へ出法の人も打交りて

南無大師遍照金剛　うろうろへし慢心堅固

應接方の人をとなへて

南無大師遍照金剛　猶大事造従平穏

海岸防禦の藩中をとなへて

南無大師遍照金剛　散銭て大名困窮

武器の職方をとなへて

南無大師遍照金剛　並る具師繁昌結構

砲術方をとなへて

南無大師遍照金剛　むだだめし蝙蝠損毛

此ほと平穏ハ兼数を経て出陣しけるハ遊ぐ外見とを

渡来せんと行末を掛ある人をとなへて

南無大師遍照金剛　鞘やまで通高堅固

出国の大丈夫をとなへてしろめしき拍出て

南無大師遍照金剛　名ハ大事戦場活名

小石川田の武家をとなへて

南無大師遍照金剛　清大羽戦場本望

各々し終りて下向を志だし帰りて大師所をとなへ返りて

投首しなひて嗚呼謹一句の真言も唱へ着によりてその
云語将変あるを思へハ二百有余年泰平の化に浴し漸く
武備衰弱せしも如何か今更いかにも是がらしと歎息
しあふ時老翁あゆミ進出て佛前に向ひ往昔蒙古襲
来の時日蓮の唱曼陀羅妙法の功力を以て夷狄を破り
しと今かく江戸近海へのり込侍る異人の始るまひ胴田
弁天と女儀の事故夷(エビス)の名にも親しみあれハあふまじ然ハ
なりとも眼前に乱妨に及ぶ夷賊を余所に見なす大師
の佛意如何ぞやかへりて真言秘密の法力を尽し速に退治
しなへかしと歎きしに大師衣の袖を拂ひなげひて

ある康をいへ近海ちかきにたてまつる

御製

白波のうちよせるとも何かせん名秋津洲ハ神風ぞ吹く　讀人知らず

蒙嶋のや海と公をつくしかゝることしてこそハ神風も吹く

落首　佃川柳点撰く

日本をなめて来たるこの浦賀沖へ蚤つ舟とつくあめりかの船

唐人の先やく帰てよあかつき孫又来るまでハ先こゝしおあいて

唐人の弄の孫あひを條につきあそるへ先あわりせんへ出来

唐人と伊勢の風にハ驚きし今ハ阿部さまハ伊勢が驚く
陣羽織り唐人が来て浚ひたりよく〳〵見れハ浦賀大変

蒸気船四たいはかりて移らまいらぬ

アメリカが来ても日本つかなひ

佛蒸ハ進上まうしも蒸気せん

日本のおびを異国でほしひ法

蒸気船隠居はかりがのんで居る

深川の水にもあま地蒸気船

鉄炮の先き陣て居つゝあし

代露ホンベン無用　沛てん山

細川もかゝみの中でもつかじかみ

おとされてあとて異見郎かどして居

おそるへハかなひやしてもやまらかし

居川のつきおもしいや先きを詠

近年ヲアイタと云流言あり　横讀則異国の名四ヶ国になる

ヲアイダ
ロメゲツ
シリレタ
ヤカスン

濱御庭御詰メ一件

一正月廿八日夜九半時頃（廿七日の夜より）御書院番頭ゟ組下へ急廻状

出其文左之通

以急廻状申達候　然者異国船近海へ渡来ニ付

濱御庭へ為御警衛出張被下候旨本多越中守

殿被仰渡候間無留中達無之通夫々心得可有之

濱御庭大手口下ヶ札出し仍而廻状急速順達

留りより濱御庭詰方へ下ヶ札返し候以上

正月廿七日

組頭　名前

番頭　名前

右之通り遣し

御書院御小性組合一日ニ二組ツヽの積りなり
廿日西小性組の当番ハ松平美作守組なり

一 廿日西小性組の者なし声ヽへ（是ハ西下に登り至るなり） 御書院西番荒良削支度いたし火事羽織の下へ陣羽織着用須大手へ御番所下宿へ入り廿八日朝六時過固場へいまた先へ西番荒次ハ小組頭次ハ小番頭なり（番頭ハ御本道具其人数凡八十人程）いつれも須の東の方海岸鍛錬をも固の順西南の角田村次に井上次に御書院次に御上り場の脇西小性組なり

一 番頭之貫同筒壱挺壱貫同筒弐挺持参をもといふいつれも

西洋流の筒なり

五千石の番頭ニて如此の手当をも致す盛大ニて西丸家の当日も隠居も西洋好みの上領分の越後柴田時ハ追々挿なる豊州のよし

なれハ助成も有之むや

一 御番荒之内佐久間和三郎といふ人ナドムイ半段モルチイル壱挺并にヤーゲルブヘルなと取交セ持ス挺持参も（其人数二十人程随従のものいつれも騎馬なんなのよし其の人々なる子ニ合せてハ去りしやう）

（めんなり）

一 廿八日昼八時頃異船大森沖へ乗り入しとの風説

人々西帥も佐久間和三郎異船乗入の御沙汰を聞て
大に驚き早々火事羽織をぬき陣羽織に着替
て火縄に火を付け参り候得とも同役の中より
それまてにも及ふましとて火を消しめさせし
とそ和三郎猶分もとるくや思ひけん番頭の家来
へ談して菜らんの火ハ沢山に用意いたし置
其儀なくてハ急に火縄へ火を付るに差支無之
といふこのとき火事羽織を出して陣羽織と取りかへしとそ

一 浜番所へ大筒五挺出張ありしにかゝりて出張し候得
とも廿九日まて出不申候次出番所より田付へ出筒
の事を談合しに今一通の出不知るくてハ見てこし
兼るとの挨拶大筒の事極々の秘事有り上てハ
玄佐公も有り参れとも実ハ出筒十分に無之よし
其上何遠の事も有之急速に間に合兼るとの
風説なり

一 猿島左近といふ浜番所代官重病に付駕籠にて
参るも有り参る拍に浜須より急使をおし参れ
とも出法不絵御兼るよし詰有りよりて小笠原請合
の御沙汰二月朔日の二日より八判元のよし
実々重病なりとハ小笠原請入しとハ若く家事如何

炭指の中合せありとも病事ハ忘るへからすなるし
瘧病ありハ後日に重き病科ニ 御付とも
論るし実病の者を小番請入るときハ場合
小番請の面々不快ニて出張る時ハ土地
なるとにも下番番頭の中合炭に成るとも
炭器方も互へし終止ト第く

一讃州箕て其番荒へ進しにハ自然酒渡へ
国めるも然を被るとにハ勝手次第酒を呑むへし
前後不覚の程に呑ミその有ルハ其炭吃度
沙汰にも及ふへし さ 酒ハ呑むとも子細なしと

なるへし故此日諸々酒持參あり下役之方にても
酒を呑まるゝにも平穏

一紀国中に二千石あり紀州の王子有 橋あり 橋まてまへて
炭柄なり 橋の向ハ紫炭 手前ハ白炭なり 正月下旬まても諸岩なるへハ
警衛の士炭柄の下ニて一杯酒盛りも致するる
蓋し

紀番荒の下宿所 杜丹芍薬の在るゝ多くそこに
こゝを出て休息を致ハ不々にて焼火をなし
杜丹芍薬ハ抜て遠慮のこの忘れし 焼火の所為
ありにて早く芽を出し又ハ蕾を致すなるか

果ハ中間小ものに抜とらるゝ類
一組頭も御番方と一同車座になりて焼火のあたり
たふに休息せしハ重役にて組頭と御番方と
同座も出来されとも俄に非番者警衛に至り
てハ打和して至極睦く組頭酒徳利を出し焼火
てかんをして徳利の口よりしきりに呑しといふ
酒でも呑なけれハ寒き物を凌き兼るとハ云に不及
なましとも三百俵以上の御番方丈夫に平生てん
とくを召て寝る人もなしいはんや一杯も夫
丼で凌く事ハ生まて始て故せめて酒ゟ呑事

酒て寒さを凌くゟよし下戸の人ハせん方なし
志ることの雑煮ゟ進く御酒の大手前に濁りかん
をけ物るゟそは又茶めし菜飯あんかけ豆
腐の類市をなして御番方を為きく〳〵し
事に酒屋ハ播磨の角になりしと也
御小性組頭松平若狭守ハ御役後初而も寒き組
なれハ切たるれて組下へ酒を受ゟ事もなかり
しゟハ御番方も酒を持参なき所能るに御書
院番の方ふて酒を呑を以て浦山敷なり右番
同士申合せて又合銭ハ壱朱ツヽ小買にいたし

各々勝元へ誰利を受出へ参りて其酒を呑つくさき
を済き居りといふ
又同組の内に大乱法の三の鍍を取分取寄て
喰しとて大おまし此事を後日或お番所にて
鍍を喰とのふハかまつまて一番論を入置
きを訴出しと云し由

一或法番元(弥九郎の悴也)而ニ出て焼火ある事を案して芝てハ
異国船の同断にもお前不宜る焼火の事ハ此度合せ彩
段々番頭の家来に承候処證局此事を問われて
若しにも至極其の事能く分り居り去るからの提灯
もなり幕法りもなり其上路々鍵然提灯をも持て
参るハ是へて同断と無用無し焼火なしくハ幕提灯
なくハ如何可致不存ハやとお尋大きに閉口

一廿九日朝四時前此同断書本新五兵衛見分として
相越し此段同断此小人同断従ふ新五兵衛番頭へ
申聞候るにハ異国船如何様之振舞有之とも
必々手出し無之様精々此番元江下知致候へし
平穏を第一にとの此御法令を征る事度度御役渡出趣
を大事にて申候事
此同断より番頭への挨し故法役から～へ對し

ても小声にて云そへなるしハよろしかるべし
しかれとも異国船如何招寄振舞をしても
手おしハ無用としふ露計ハ小声に
一廿八日浜御殿番佐橋市左衛門松平殿御組頭大久保八郎左衛門
出役し御殿番ハ諸道組番所の傍に会所をまうけて座せり番頭ハ床机なり
一浜御殿御釣台の四方御池をみるに水徹底して
底に大小の魚数万あつまるさまよく見ゆ当随従の
侍又ハ中間なとの釣上る酒の肴になるきにまんまと難計
うるきを釣あらふハ大小見計らひ捨置又ハ魚の

持筒へ入て帰るかよし
一宿番之内名前不知中間へ云付て度々酒を買
におし主人ハ呑ともも家来の呑を制し無きハ主従
との取合になりて主人数々悪口さまさましとそ
一進物番へお役とも御番士云此日ハ御供番の日なれハ
早く退散いたし度と組頭へ云上る組頭の云ふ吏ハ
お役の用なりこの場に望みて早く退散ハならぬ思
事なり早く退散せんとならぬ思評するハ只刻出役
を承りけり
一浜庭の東海岸によりて南を見れハ新築の御台

場二ヶ所其上に浮ひて見へ東西の方ハ芝の田源川
の邊の国々の幕張又ゐる志るしの風に飄りて
見申す佐一きつ至勇ましく見物ハ白奥よりの
かす里数なつなりて面白しなとも数へ多て武家番
士組頭へ夫々世バ組頭苦に御手前ハ先刻より四方の
氣色たるし斗りのみなり右等を夫々毛ハ平生の
事なり其にて右拍の事無用といましめられて赤
めんし多る顔色ハ白奥よりの舞のごとし

一 武人の家来みの乞着て轎夫のそばによりて眠り
多るに是のハ出て大きに驚き目を覚しよろしく
蓑を脱き捨つり蓑着用の時ハ火に近寄るまじ
き事そかし

一 御庭の中御傳場の隅ま小屋を舗人置隠とし給
ゐるにや懸て若侍の用多し云とまとまり

一 演の時庭ハ五十年来格別に御手入有て極く御大切の
御掟俗の場故近頃表御殿向ふもちらましし
若の御殿まへに容易に出ることも多く成りしを田
村井上の両士御預りの大砲をイケ近西に数年
御かり近の芝山を掘返し数々の体又牡丹島等業
たちみけハ御番士の下宿となり其上宿屋中等の知行

東より俄に峨峯の吏人なとのあまく御國中を踏
あらし事をかの御手入あるへし
君の世しるしハいつに思しめしつらん世の中のこと
様々に替るもバかりなるその交易の交易を失ふか
らすみぐよし 異國の法活も合次第なり
右者須磨の水門外にして御書院番衆の咄し歩
を世にまかせて詠み船路の筆記し置りと
いふ
細しれなし声遠く世へしまくにきて遠
ひもあり以無し

右正月廿九日御小姓組の御番衆へ汁を出しらへて
振舞し御数寄屋陸尺の本をもつて書写置

30h